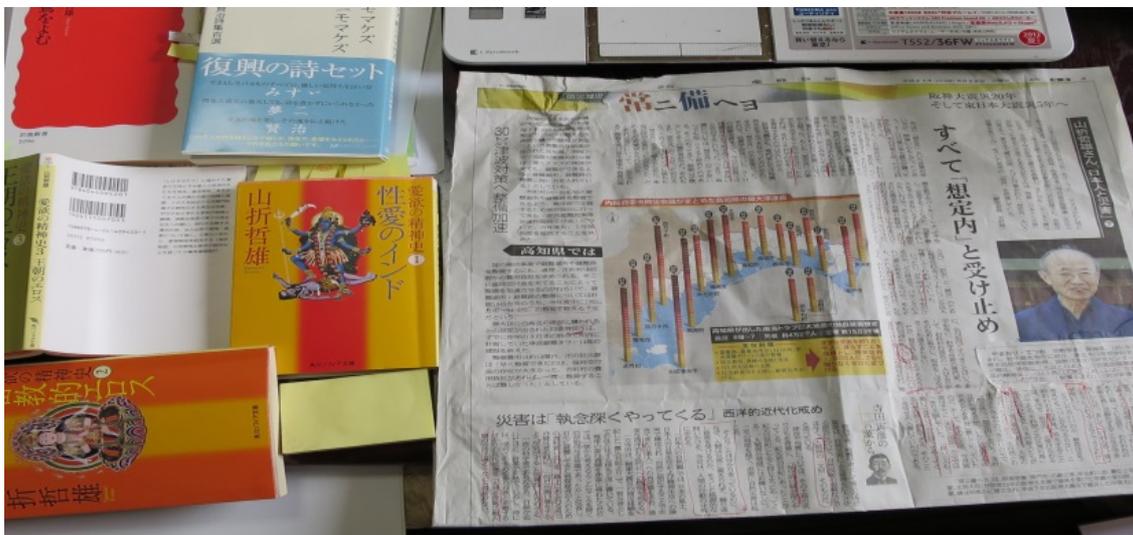


## 新聞記事からニセ断食

奥田和子

5月26日付産経新聞夕刊の4面は編集委員北村理氏による特集記事で、山折哲雄さんの「日本人と災害」①であった。「阪神大震災20年そして東日本大震災5年へ」という見出しで“すべて「想定内」と受け止め”という要約の大きな活字が私を圧倒した。



「確かに、おっしゃる通り。ガッテンです」オシャレな記事に共感を覚えた。写真の下に氏の経歴と著書が出ていたので、すぐさま書店で入手した。

『天災と日本人 寺田虎彦随筆選』『絆 いま、生きるあなたへ』を読み、その後注文の書物が来て『愛欲の精神史1～3』などを読んだ。私の好奇心が全開したのは『愛欲の精神史①性愛のインド』であった。釈迦とガンジーの性の禁欲と断食を読んだ。人生の4期のうち後半の林住期、遁世期とくに遁世期には欲望を断ち切って聖の領域へ踏み込んでいく。記事に接してから約半月間、こうした読書を通してインドと釈迦の世界を彷徨しながら先人の教えを学ばせてもらった。

ふと東日本大震災で水や食料が乏しかった被災者の辛さに思いをはせた。もしまたどこかで巨大災害が起きたなら、3日間飲まず食わずの状態に追いやられることになるだろう。そのとき、果たして人々は生き延びることができるの

だろうか。わたしは実体験にとりかかることにした。3日間の断食である。しかしこれは思ったほど簡単ではなかった。まず、喉が渇き我慢ができない。そこでやむなく1日4回、ふだん飲んでいるルイボスティ、ほうじ茶、しょうが湯など計1リットル飲んだ。夕刻になるとめっそうお腹が減る。冷や汗が流れ我慢の限界に達した。しかたなく雑炊を煮て茶碗1杯分食べた。3日間そのようにした。それが断食か！といわれればそれまでだが、これが精いっぱいであった。災害時にはなんとかなるさ！とタカをくくっている人々、飽食に慣れ親しんだ昨今の断食は、言葉に尽くせない苦行をともなうことを世に知らさなければならぬ。

(2015年6月)